



1990年初頭からの日本の30年は失われた30年といわれますが、国内の議論の多くが本題に対する賛否を明らかにせず、枝葉の技術論に終始してしまっています。

教育なら、大学入試の英語4技能試験の活用がその例です。受験生のいる地域によって格差があるため、

**柳澤 幸雄** 北鎌倉女子学園中学校高等学校学園長

「社会性」を育成し、スペシャリストに



導入見送りになりました。日本にとって唯一の資源である人を育てるために、方向性としては必要だと感じている人がいても、部分的な問題が指摘されると、改革ができずにいるのです。

今年起きた学校の臨時休業中の対応でも同じことがいえます。通信環境のない児童・生徒がいることを理

やなぎさわ・ゆきお 昭和22年生まれ。東京大学卒。同大学院修了。工学博士。開成中学校・高校校長などを経て現職。米ハーバード大学の公衆衛生大学院環境健康学科でベストティーチャーに選ばれる。

護送船団で船足の遅い船に全てを合わせていくことは、子どもたちの芽を摘むことになりかねません。皆が同じであることは公平とは違います。うまく当てるまらない子どもに、どのよう

どう変わるのか。私は「知育」とともに学校のもう一つの役割である「社会性」の育成が、強く認識されるようになってくると思います。

極端に言えば、知育は端末があれば家でも可能です。社会性は、生徒集団の中でパワーゲームやマウンティングなどを通じて育成されます。どうやって人と

体験させ、友達がいることがどれだけ楽しいことかを実感させる。言葉だけでなく、体験で身に付けさせるのが学校の役割です。

3月まで校長をしていた開成中学・高校では、その役

次回は早川義裕・新潟県上越市教委教育長

割を上級生が果たしてしました。下級生は部活動などで指導を受け、先輩をロールモデル(模範)として自律していきます。高3になって受験勉強し、東大に合格する姿を見ていることで、東大受験を高いハードルと感じない。チャレンジする場合にも、圧倒されない自信が持てるようになります。

4月から学園長になった北鎌倉女子学園中学・高校では、1年生の希望者に「柳澤ゼミ」を開いています。テキストを読み、問題を解くのではなく、問題を作るといふゼミです。

日本がゼネラリストを育てる時代は終わりました。生徒の「スペシャリティ」を育てる教育を展開したいと考えています。